

～教員おすすめ本～

No. 14

総合社会学部 社会・マスメディア系専攻
清島 秀樹



『怪談牡丹灯籠』

三遊亭円朝 著

【先生からのコメント】

圓朝は、幕末から明治期にかけて東京で活躍した噺家。小道具を使わず、扇子一本で語る形式の現代落語の元祖で、別格の大名人。彼は多くの新作噺を作り出すが、その一つが、『怪談牡丹灯籠』。

これは、中国明代の怪奇小説『剪灯新話』の内の一話を基にした怪談噺で、彼の高座の口述速記から起こした文章が上記の本になっている。まず、文章がすばらしい。黙読しても音読しても、情景が鮮やかに目に浮かんでくる名文で、上々の日本語。また、語りの上手さのせいで、ぞくぞくして、気持ち悪くなるほど怖い。何度読んでも、背中がゾワツとなる。そして、ツヤと色気があり、美しい。言語芸術の極致。



『思考と行動における言語』

S. I. ハヤカワ 著
大久保忠利 訳

【先生からのコメント】

著者は、意味論を専門とする米国の言語学者。大学教授時代、学内の学生運動に対して毅然としてウィットに富んだ態度をとったことが人気を呼び、米国上院議員となる。議員時代は、辛辣で、当意即妙の言動で有名。

或る時、議会で居眠りをしていた点を指摘され、次のように語った：「5分ですむ話を1時間もしているのを、聞く必要があるのか」と。この本に一貫するのは、「人々の不毛な争い、誤解のかなりの部分が、言語の諸性質を知ることにより、避けることができるのではないか」という指摘。文章は平易で、生き生きしており、知的興奮、ワクワク感を味わい得る。ただし、日本語訳の文字が古いのが残念。

2017年7月14日
近畿大学中央図書館